

## 浅間山の火山活動解説資料（令和5年7月）

気象庁地震火山部  
火山監視・警報センター

山体の西側での膨張を示すと考えられるわずかな地殻変動が継続しています。また、火山性地震や火山ガス（二酸化硫黄）放出量は3月下旬以降、それ以前に比べて多い状態が続いています。引き続き、山頂火口から概ね2kmの範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があります。

山頂火口から概ね2kmの範囲では、弾道を描いて飛散する大きな噴石や火砕流に警戒してください。地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

噴火時には、風下側では火山灰だけでなく小さな噴石が風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

令和5年3月23日に火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）を発表しました。その後警報事項に変更はありません。

## ○ 活動概況

## ・ 噴煙など表面現象の状況（図1～2、図3-①、図4-①③、図10-①）

山頂火口からの噴煙は白色で、噴煙の高さは22日に火口縁上800mを観測するなど、3月下旬から噴煙の高い状態が続いています。

火映は、2023年6月30日以降観測されていません。

## ・ 火山ガスの状況（図3-②、図4-②、図10-②）

期間内に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は1日あたり200～1,100トンであり、6日に1日あたり200トンと顕著に減少しました。その後は1日あたり300～1,100トンで推移しています。

## ・ 地震や微動の発生状況（図3-③～⑤、図4-④～⑧、図5、図9、図10-③④）

山体浅部を震源とする火山性地震の日回数は、5月中旬から緩やかな増加傾向が続いている中で、4日から増加し、かつ振幅も増大しました。5日には火山性地震の日回数が161回に達するなど多い状態となりましたが、8日以降、地震回数は減少傾向となり、下旬には日回数は数回～30回前後で経過しました。

火山性地震の震源は、従来からみられている山頂直下の深さ-2～0km（海拔0～2km）付近、及び黒斑山付近の深さ0km（海拔0km）付近に分布しました。

火山性微動は、上旬に時々発生し、その後も散発的に発生しています。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)

次回の火山活動解説資料（令和5年8月分）は令和5年9月8日に発表する予定です。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、関東地方整備局、国土地理院、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び長野県のデータも利用して作成しています。

資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』『数値地図25000（行政界・海岸線）』を使用しています。

・地殻変動の状況（図3-⑥、図4-⑨⑩、図6～8、図10-⑤）

3月中旬以降、浅間山の西側での膨張を示すと考えられる傾斜変動が認められています。3日頃から5日頃にかけて一時的に変動が大きくなりました。その後、傾斜変動は鈍化しましたが、17日頃から西側での膨張を示すと考えられる変動がみられています。

また、GNSS連続観測においても、一部の基線でわずかな伸びがみられています。光波測距観測では、特段の変化は認められません。



図1 浅間山 山頂部の噴煙の状況  
追分監視カメラ（7月7日）



図2 浅間山 山頂部の噴煙の状況  
鬼押監視カメラ（7月28日）

- ・山頂火口からの噴煙は白色で、噴煙の高さは22日に火口縁上800mを観測するなど、3月下旬から噴煙の高い状態が続いています。

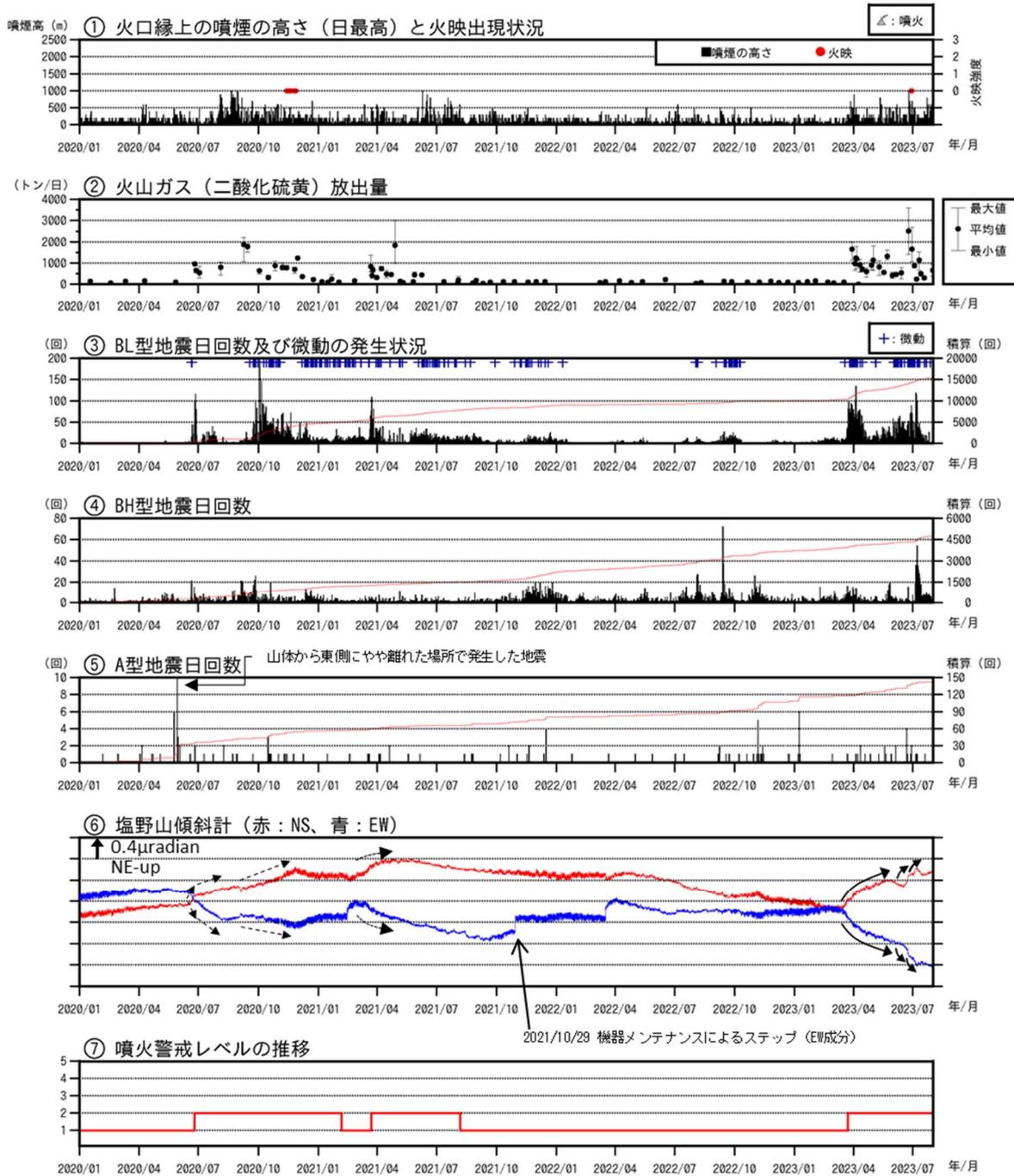


図3 浅間山 火山活動経過図（2020年1月1日～2023年7月31日）

- ・噴煙の高さは22日に火口縁上800mを観測するなど、3月下旬から噴煙の高い状態が続いています(①)。
- ・火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は1日あたり200～1,100トンでした。6日に1日あたり200トンと顕著に減少しましたが、その後は1日あたり300～1,100トンで推移しています(②)。
- ・山体浅部を震源とする火山性地震の日回数は、5月中旬から緩やかな増加傾向が続いている中で、4日から増加し、かつ振幅も増大しました。5日には火山性地震の日回数が161回に達するなど多い状態となりましたが、8日以降、地震回数は減少傾向となり、下旬には日回数は数回～30回前後で経過しました。(③④⑤)。
- ・3月中旬以降、浅間山の西側での膨張を示すと考えられる傾斜変動が認められています。3日頃から5日頃にかけて一時的に変動が大きくなりました(⑥黒矢印)。その後、傾斜変動は鈍化しましたが、17日頃から西側での膨張を示すと考えられる変動がみられています。

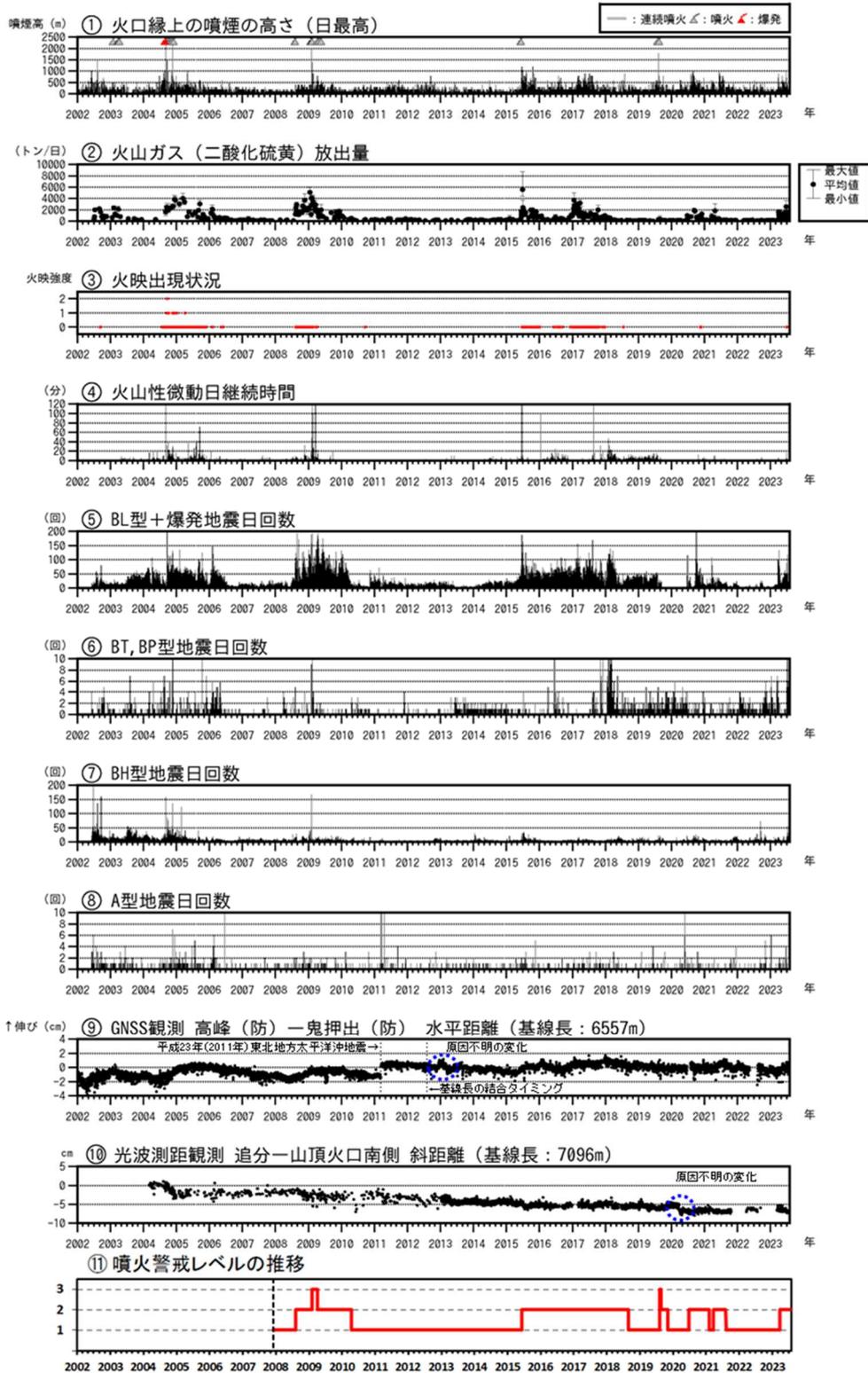


図4 浅間山 火山活動経過図（2002年1月1日～2023年7月31日）

計数基準は石尊観測点で南北成分最大振幅0.1 $\mu$ m以上、S-P時間3秒以内、火山性地震の種類は図9のとおりです。

② 国立研究開発法人産業技術総合研究所及び東京大学による観測結果が含まれています。

③ 赤印は火映を示します。強度については、以下のとおりです。

0：肉眼では確認できず、高感度の監視カメラでのみ確認できる程度 1：肉眼でようやく認められる程度

2：肉眼で明らかに認められる程度 3：肉眼で非常に明るい色で異常に感じる程度

⑨ 2012年7月31日まで 気象庁の高峰一鬼押観測点間の基線長（基線長7417m）。

2012年8月1日以降 高峰(防)一鬼押出(防)観測点間の基線長。

(防)：国立研究開発法人防災科学技術研究所。2010年10月及び2016年1月に解析方法を変更しています。

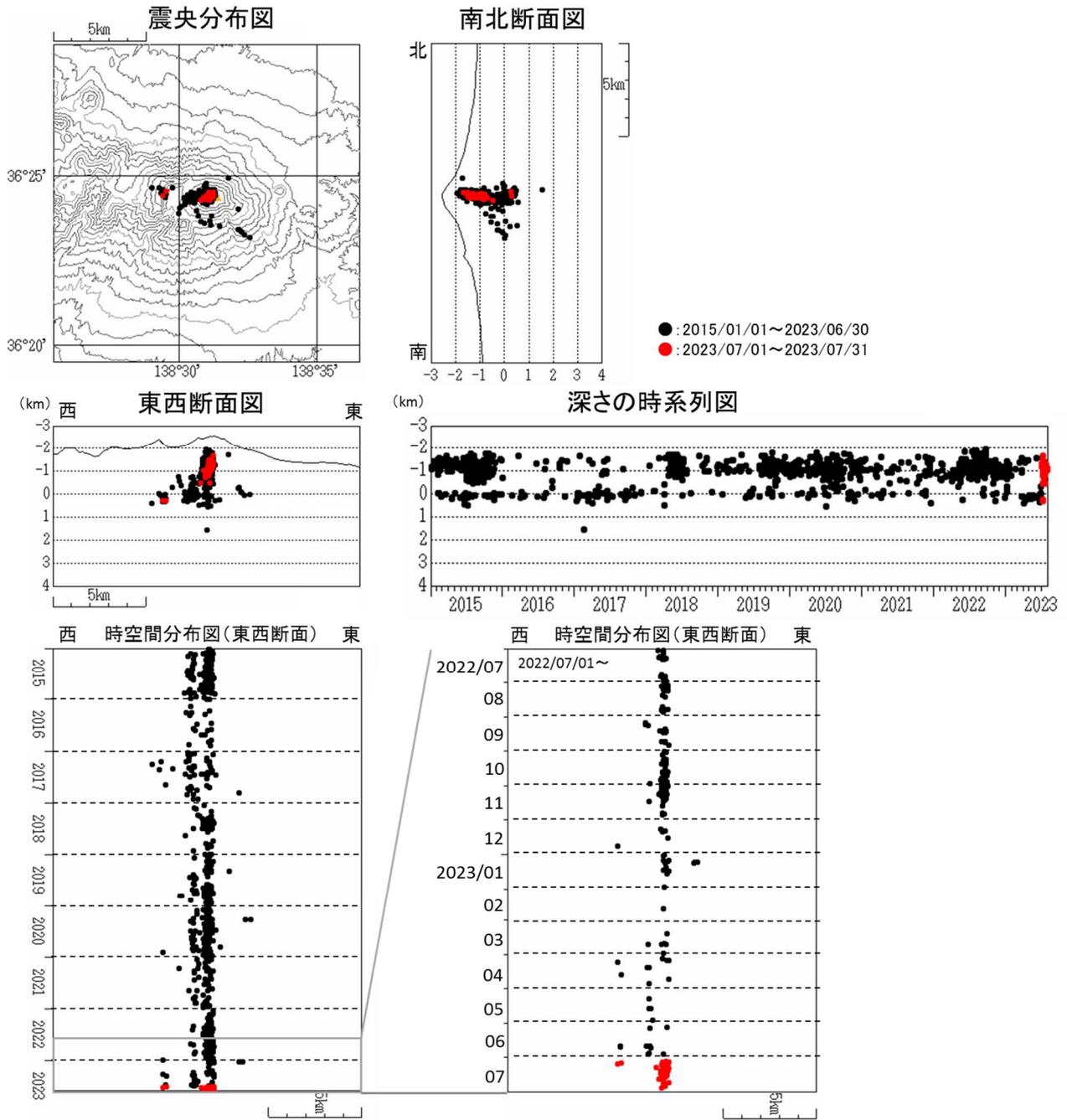


図5 浅間山 震源分布図（2015年1月1日～2023年7月31日）

- ・火山性地震の震源は、従来からみられている山頂直下の深さ-2～0km（海拔0～2km）付近、及び黒斑山付近の深さ0km（海拔0km）付近に分布しました。

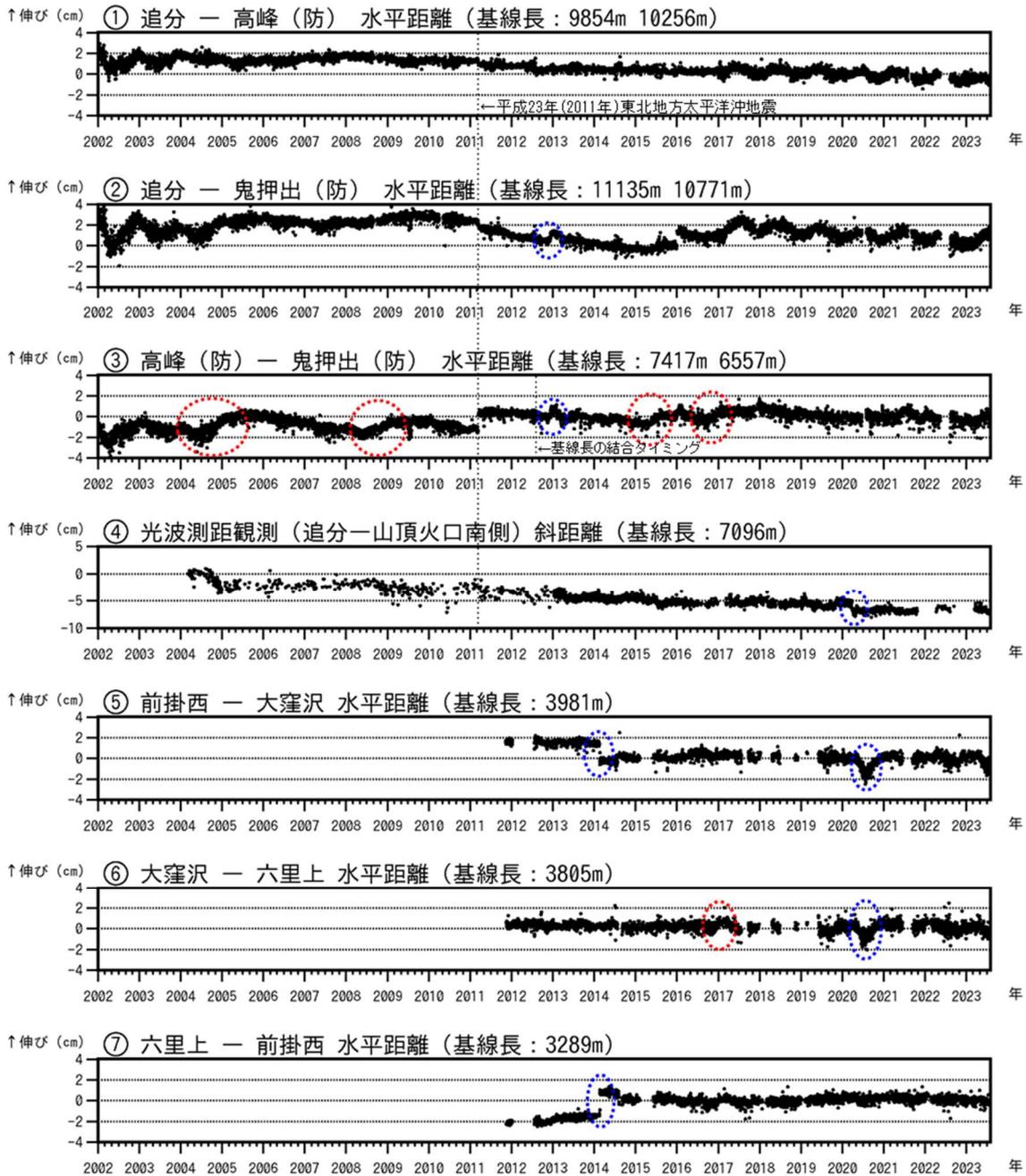


図6-1 浅間山 GNSS 連続観測及び光波測距観測の結果(2002年1月1日~2023年7月31日)

GNSS 連続観測においては、2010年10月及び2016年1月に解析方法を変更しています。

(防)：国立研究開発法人防災科学技術研究所

①~⑦は図7の①~⑦にそれぞれ対応しています。空白部分は欠測を示します。

- ①2012年7月31日まで 気象庁の追分-高峰観測点間の水平距離(9854m)。  
2012年8月1日以降 気象庁の追分-防災科学技術研究所の高峰観測点間の水平距離(10256m)。
- ②2012年7月31日まで 気象庁の追分-鬼押出観測点間の水平距離(11135m)。  
2012年8月1日以降 気象庁の追分-防災科学技術研究所の鬼押出観測点間の水平距離(10771m)。  
追分観測点は、2016年12月に移設しており、その後、基線長に年周変化がみられています。
- ③2012年7月31日まで 気象庁の高峰-鬼押出観測点間の水平距離(7417m)。  
2012年8月1日以降 防災科学技術研究所の高峰-鬼押出観測点間の水平距離(6557m)。
- ⑤⑥ 2020年5月頃からの変動は大窪沢の固有の変動であり、火山活動によるものではないと考えられます。  
その他、青破線で囲んだ変化は原因不明の変化ですが、火山活動によるものではないと考えられます。

・過去には、浅間山の西側を挟む基線などでわずかな伸びがみられました(③⑥の基線の赤破線の期間)。これらは浅間山の西側の深い場所でのマグマの蓄積を示すと考えられています。

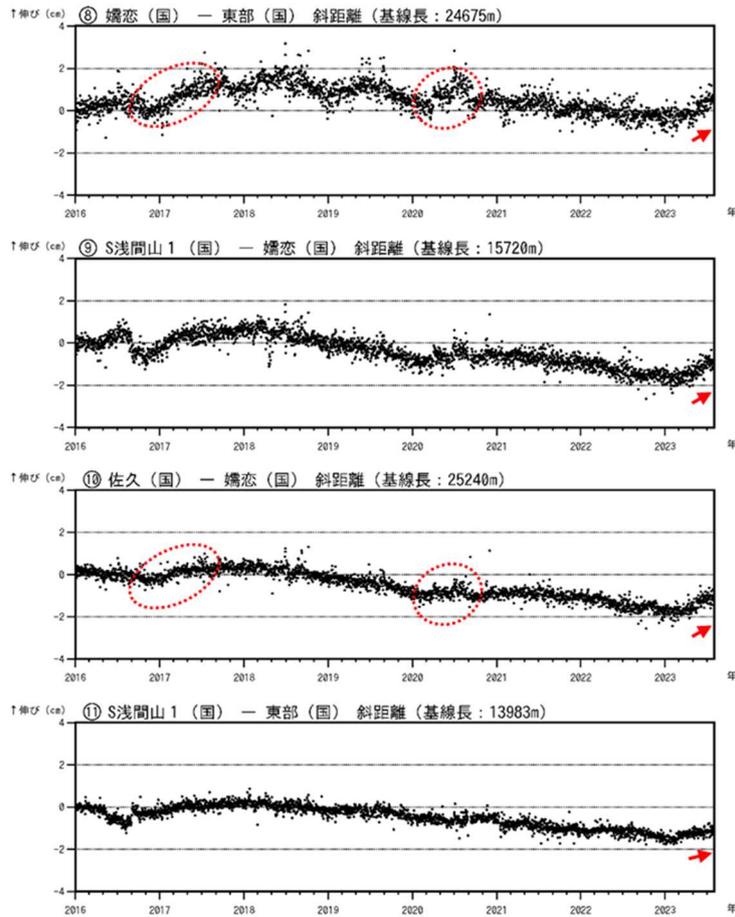


図6-2 浅間山 GNSS 連続観測結果(2016年1月1日~2023年7月31日)  
 ⑧⑨⑩⑪は図7の⑧⑨⑩⑪にそれぞれ対応しています。空白部分は欠測を示します。(国): 国土地理院。

- ・ GNSS 連続観測では、一部の基線でわずかな伸びがみられています(赤矢印)。
- ・ 過去には、浅間山の西側を挟む基線などでわずかな伸びがみられました(⑧⑩の基線の赤破線の期間)。これらは浅間山の西側の深い場所でのマグマの蓄積を示すと考えられています。

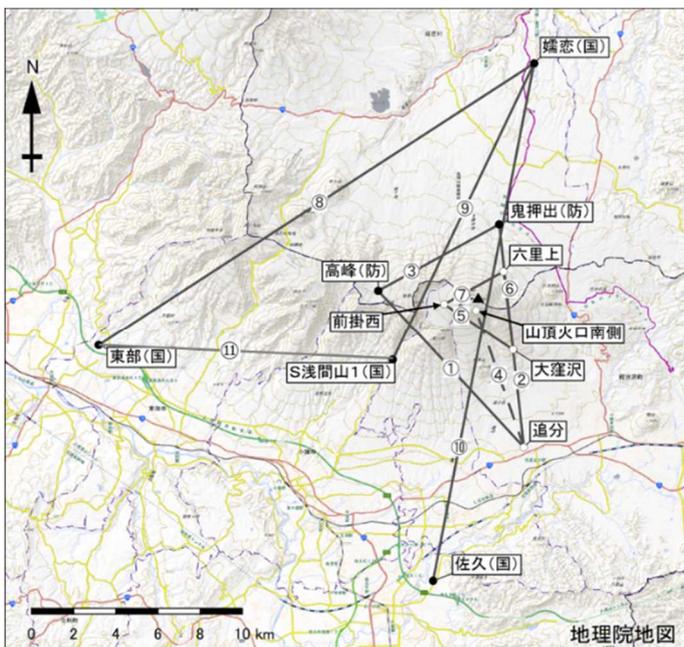


図7 浅間山 地殻変動連続観測点配置図  
 (防): 国立研究開発法人防災科学技術研究所、  
 (国): 国土地理院  
 GNSS 基線③は図4⑨に対応しています。また、GNSS 基線①~③及び⑤~⑪は図6の①~③及び⑤~⑪にそれぞれ対応しています。  
 光波測距測線④は図4の⑩、図6-1の④に対応しています。

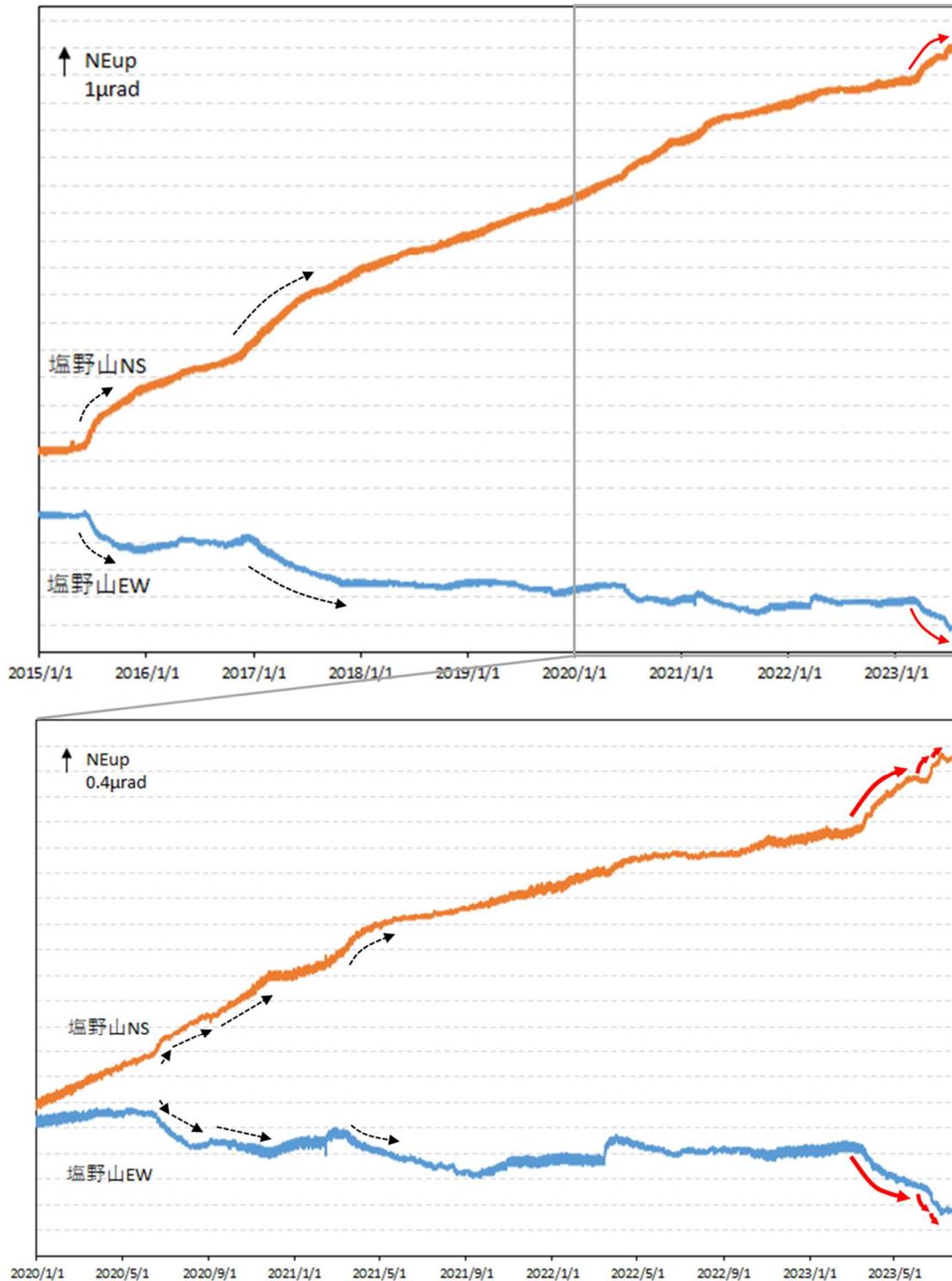
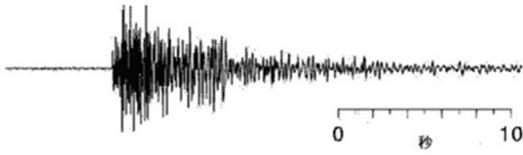


図8 浅間山 塩野山観測点における傾斜データ（2015年1月1日～2023年7月31日）  
 データは時間平均値を使用しており、長期にわたるトレンドを補正しています。  
 下段は上段に比べて縦軸を拡大しています。

- ・ 3月中旬以降、浅間山の西側での膨張を示すと考えられる傾斜変動が認められています。3日頃から5日頃にかけて一時的に変動が大きくなりました（赤矢印）。その後、傾斜変動は鈍化しましたが、17日頃から西側での膨張を示すと考えられる変動がみられています。
- ・ 同観測点においては、過去にも浅間山の西側での膨張を示すと考えられる傾斜変動がみられていました（黒矢印）。
- ・ これらは浅間山の西側のやや深い場所でのマグマの蓄積を示す変化と考えられています。

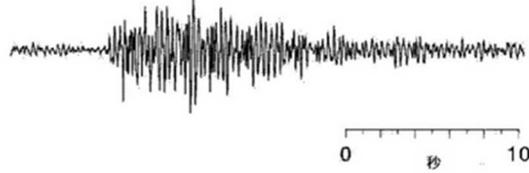
A型地震：P,S相が明瞭で卓越周波数は10Hz前後と高周波の地震



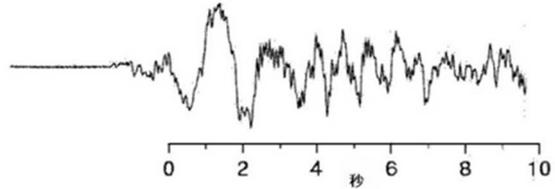
BL型地震：P,S相が不明瞭で卓越周波数が約3Hz以下の地震



BH型地震：S相が不明瞭で卓越周波数が約3Hz以上の地震



EX型地震(爆発型)：爆発的噴火に伴って発生する地震



BT型地震：一定周波数の振動がゆっくりと減衰していく地震



BP型地震：ハーモニックな(調和)震動が記録される地震



図9 浅間山 主な火山性地震の特徴と波形例

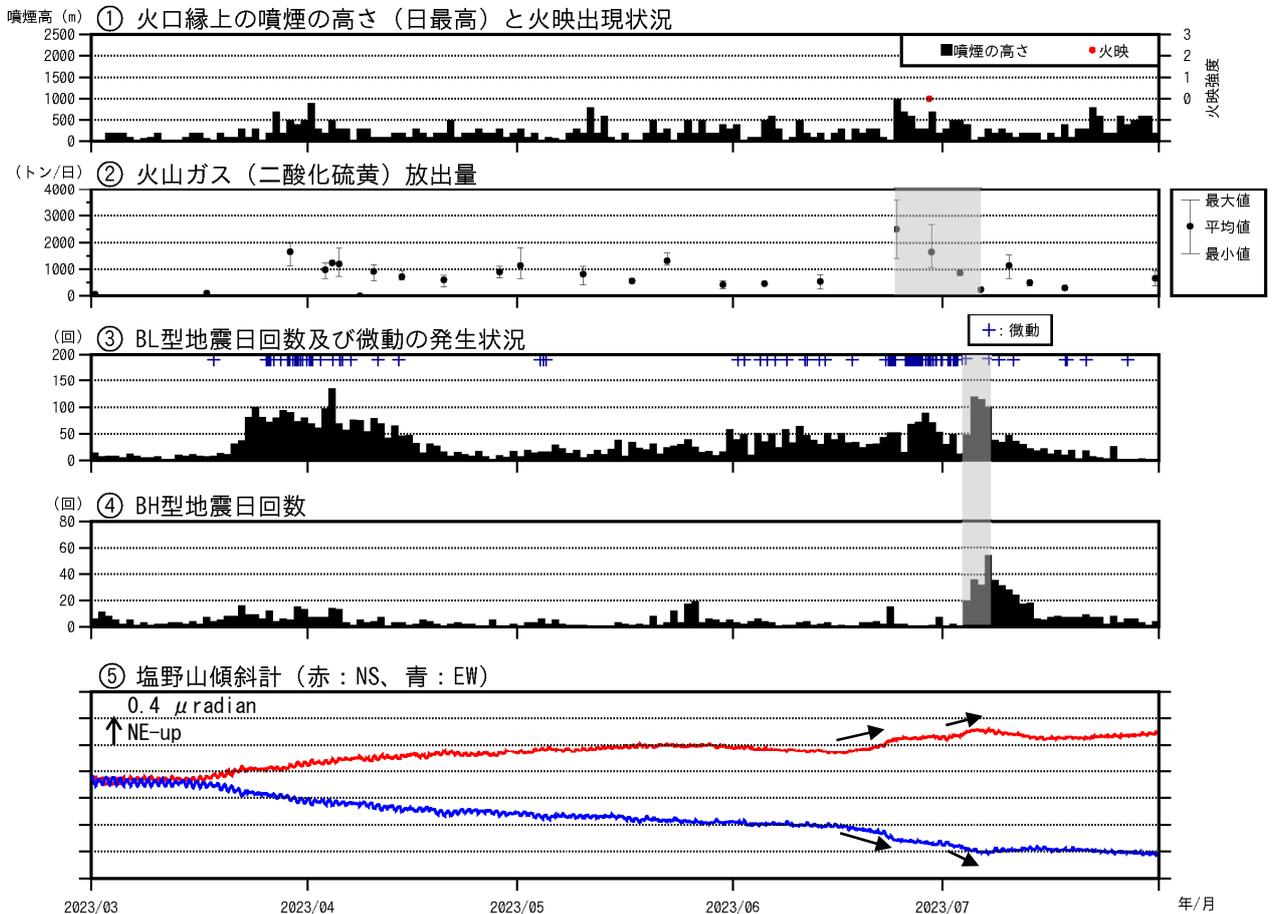
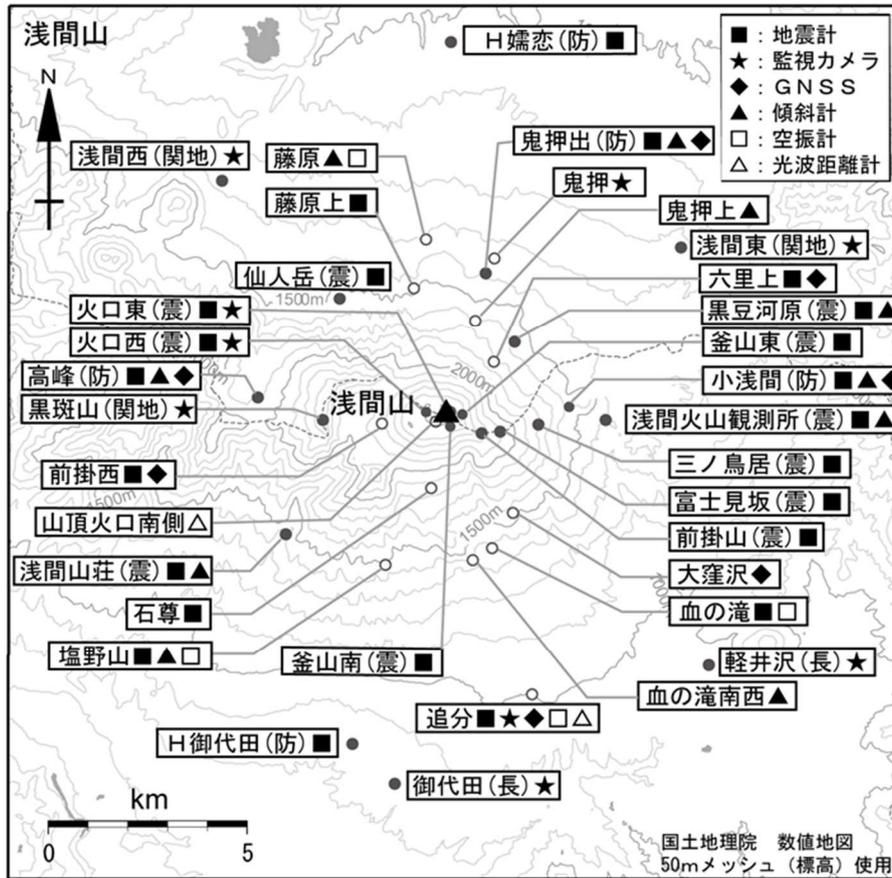


図10（前ページ） 浅間山 活動経過図（2023年3月1日～7月31日）

- ・1日あたりの火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、6月24日に2,500トンでしたが、それ以降減少し、6日には200トンが観測されました（②の灰色部分）。
- ・山体浅部を震源とする火山性地震の発生は、4日から7日にかけて増加が認められました。（③及び④の灰色部分）。
- ・6月16日頃から23日頃にかけて一時的に傾斜変動が大きくなりましたが、3日頃から5日頃にかけても同様に一時的に変動が大きくなりました（⑤の矢印）。
- ・これらのことは、6月末頃から7月はじめにかけて山体浅部の火道の一部で閉塞が進行していたことを示唆します。それ以降、1日あたりの二酸化硫黄の放出量も300～1,100トンで推移し、山体浅部を震源とする火山性地震の発生に減少傾向が認められ、かつ傾斜変動の加速も終了したことから、進行していた火道の閉塞が解消されたとも考えることができます。



小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。  
 （国）：国土地理院、（防）：防災科学技術研究所、（震）：東京大学地震研究所、  
 （関地）：関東地方整備局、（長）：長野県

図11 浅間山 観測点配置図